

昭和四十八年八月県教育庁

文化課の埋蔵文化財調査では、

『嘉瀬遺跡』として、観音山

三十三観音霊場付近の斜面、

金木南中学校付近県道より南

の一带を調査し、縄文前期の

土器は三十三観音石仏のある

斜面から出土し、土師器、須

恵器は南中付近の県道南側に

散布する事が確認されている。

また、中柏木の『鎧石遺跡

』は、津軽鉄道の毘沙門停留

所、嘉瀬駅間の陸橋付近は縄

文後期、晩期の時代の遺跡と

見られ、縄文晩期の出土品が

出た事を報告しているし、中

柏木字不動野の『三ノ沢溜池

遺跡』は縄文後期の遺物包含

層があるとされている。

『清久溜池遺跡』は、通称

『人丸の崎』と云われる台地

全体が土師器、須恵器時代の

遺跡で、住居跡（堅穴）があ

るものと推定している。

『語部』以前の縄文時代の出土品等によって、先住民が住んでいた事は証明されるのであるが、古墳時代の証拠として、二ツ森は確認されるかどうかとなれば、今までの調査からみて自信がない。

それは、今は取りくずされてしまった一ツ森を考えた場合、昔から一ツ森は蝦夷の族長の古墳ではないか、人工的に盛った山ではないかと云われ、あの盛の中には人骨や副葬品の宝物があると言ひ伝えられてきたものであるが、ブルトナーによって崩され消滅し、宅地に整地されてしまったが、その作業中に人骨も宝物も出なかったという。

人丸の崎に、住居跡の堅穴がある。と昭和四十八年の埋蔵文化財調査報告があったのに、これも、わがふるさとを探る会が発見した頃開田され、今は水田になっているので先住民の堅穴跡を探ることができなくなった。

* * *

私は、ここ一ヶ月ほどの間、机の上に嘉瀬の地図を広げ、三十年前の嘉瀬、五十年前の嘉瀬、また小学校入学前後の頃の嘉瀬を幼い頃の記憶を必至になってよみがえらせようと見つめている。

そして、百年前、五百年前、千年前の嘉瀬の姿を、この一枚の地図の上に推論してみたいと思っている。

『これから諸資料をあさり、明治・大正・昭和の初期を次集第四集に（その二）として、まとめることにします。』



▲小栗崎稲荷神社全影

小栗崎

稲荷神社

昭和五十七年七月二十四日ふ

寛永十年

るさを探る会の月例実地踏査を実施する。目的は小栗崎稲荷神社の来歴を調査することにあつた。神社で総代の方々が待っていてくれた。

金木郷土史によると、小栗崎稲荷神社は勧請年代不詳なるも

(西暦一六三三年)再建とある。

祭神倉稻魂命 所在北津軽郡

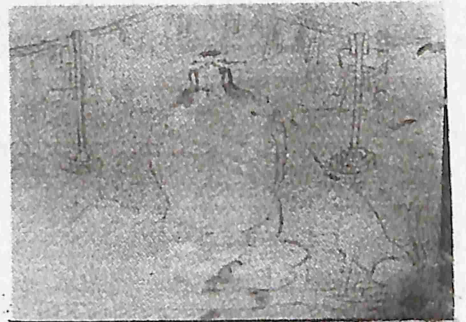
金木町大字嘉瀬字上端山崎一一

二ノ一 例祭旧五月三日、宵宮

旧六月九日、講中総代、代表松

川清造、松川駒太郎、松川儀一、

松川友太郎、棟方義雄、松川栄



上 祭神 御尊像 施主伊藤弥左エ門 寛政八年(1976)

下 狐絵馬額 施主松川奥太郎(明治7年)



▲稲荷神社総代

ったことは庚申塔に刻まれた小栗崎村中に証明付けられ、神木は神社裏のセンの木だったが、落雷で今は朽木となっている。

祭神の倉稻魂命は穀物の神で先導役が正一位稲荷大明神。

二 踏査者 山中

正津、木村治利

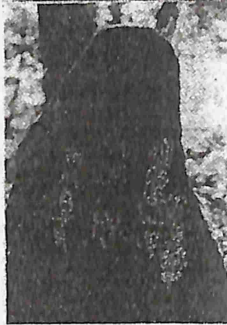
木立久二、原田

万治 伊藤定四

郎、木下清一



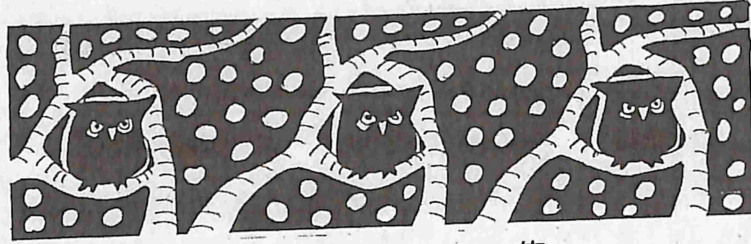
▲杉の御神木



上 センの朽木
下 庚申塔

嘉瀬文人の源流

俳句の流れその人脈



沢田 薫



今もって、私が俳句を作っているのか、嘉瀬の俳句のルーツを探ぐってくれと云うのが、私にあたえられたテーマである。

ここで誠に残念に思ったのは、嘉瀬俳句の先達者が全部、こゝ二・三年の

うちに続けて逝ってしまったことである。

土岐石人、小山内昭人、山中梵貝、小倉私月、山中天小人の諸氏である。このうちで、どなたか一人でも生きておったら、ルーツを大正

初期から明治時代まで遡れたのにと悔やまれてならない。

そこで、結局は私の持っている資料と、私の知っている範囲内から出発せざるを得ないことをお許し下さい。要するに、若い年代からと云うことになります。

昭和二年から三年にかけて、土岐石人氏が『柳瀬』と云う吟社を作っている。会員の多数が筆書きで、多いときは十九名にもなっている。各人の原稿をそのまま綴り、廻し読みしたらしい。会員は遠く北海道から、青森市など、各市町村に渡っている。その中より嘉瀬の会員の俳句を抜粋してみる。

裏門をあけて柿ある園広し

土岐石人

酔後尚ほ友ほし心松の内

山中天小人

霧低き冬田の果てや一河あり

沢田海人

七五三張りし門登山の峯晴れて

山中不老

花桐や人手ぬる大屋敷

吉崎光南

山莊の木戸鎖されて柿赤し

山中牧童

順に書き移したい。

瀉遠く見ゆる日和田嶋とべり

伊藤小子部

海人君を悼む

残菊の盛を待たで君逝くか

石人

その後、昭和四年から五年にかけて、山中天小入氏が『土筆』吟社を作っているが、その資料は全くない。その前後に『河骨』と云う吟社も作った噂もあるが、これも証拠がない。

『土筆』については、私が発刊していた昭和廿七年五月号の『砧』誌に沿川村常海橋（現板柳町）の館岡林影氏が、『土筆』と云う題の選をお願いした。その選后にこんな事を書いているので抜き書きしてみよう。

『最初にちよつと昔語をするわがまゝを許されたい。』

たしか、昭和四年であると思いますが、私が俳句を作り初めた頃、嘉瀬村から、山中天小入氏主宰の『土筆』を買ったのであった。それが機縁となって土筆の会員にさせて頂いたのであった。其の頃嘉瀬村では、沢田海人、土岐石人、平井鉄華に、御大の山中天小入氏等が盛んに活躍していたし、その隣りの金木町で云々……』

私の家に、私の父、沢田海人死亡による上質な紙での追悼句集が残っていた。表紙には

昭和八年十一月十六日

露玉集

嘉瀬俳人会

と、土岐石人氏の達筆な筆書きである。二枚目には、『筆の跡』故沢田海人 〃揚雲雀叢響れし日の光り、外二句が掲出。以下追悼句を

悼海人	菊のつほみによする思をいだきや	天小人
悼海人	冬椿敷をつらぬく夕陽かな	鉄華
悼海人	白菊の枯れてもいとし芽の伸びよ	昭人
悼海人	神無月いづこに流るゝ鳥一つ	香石
悼海人	二つ三つ若芽残して菊枯るゝ	美葉
悼	枯菊の庭は夕陽に染りゐる	一声

外当日席題として、各人の落葉の句が収録されている。以上見るに昭和八年頃は、私の亡父も入れて八名くらいより俳句を作っていないかだったことになる。

その後、昭和十七年私が俳句に目覚め、天小人、石人、昭人氏等に教へを乞うまで、嘉瀬の俳句先達は、まとまって俳句は作っていないかだったようで、個々には作っていたとしても、何処かの俳誌に入り、発表すると云うところまでには致っていない。唯天小人氏だけは一人熱心だったようで、鱗ヶ沢の外海吟社に投稿していたらしい。

嘉瀬の俳人達の俳句系統は、白田亜浪の『石楠』系で、その同人達。桂関村、青木郭公等に師事したらしく、私の幼なとき、両氏の色紙短冊を見た記憶がある。

今まで俳句の作者を 俳句雅号だけで書いたので、本名と、その家族系統を参考のため書いておく。

☒ 土岐石人（本名土岐繁一、役場職員土岐伊久雄氏の養父 山中操氏の叔父）

☒ 山中天小人（本名山中忍、嘉瀬の寺コ門徒宗、明誓庵主を長く務め、金木郵便局長山中満氏の敬父）

☒ 沢田海人（本名沢田喜一郎 私の亡父）

☒ 山中不老（本名山中育、山中勇湖氏の大叔父に当る）

☒ 吉崎光南（本名吉崎十造、吉崎好光Ⅱチャンネルの敬父）

☒ 山中牧童（本名山中敏一、教員生活を終えて、今は山兵煙草店の店主）

☒ 伊藤小子部（本名伊藤慶三郎、嘉瀬小学校長で退職、伊藤哲彦氏の敬父）

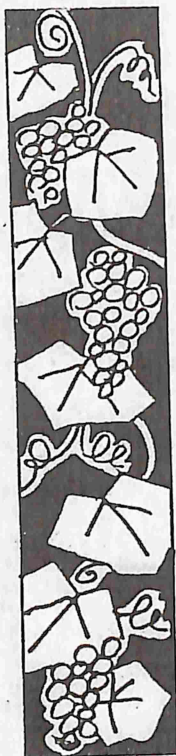
☒ 平井鉄葉（本名平井繁太郎、鍛冶屋で平井清Ⅱ機炎Ⅱ氏の敬父）

☒ 小山内昭人（本名小山内繁四郎、小山内瞬氏の敬父、主に昭人の名で通用した）

☒ 今 香石（本名今久雄、今司真雄氏の敬父）

☒ 原田美葉（本名原田要助、通称自転車屋、原田きぬ子の養父）

☒ 小松一声（本名木下無市、亡木下恣の敬父、若かりし頃、民謡の大家で、津軽山唄は特に上手で、鎌田稲一と嘉瀬民謡の両翼であった）



昭和十七年 十七才、私は嘉瀬村役場続きにあった。嘉瀬村農会に入る。亡父の俳句帖など見たりして、多分に俳句心のあった私に、役場に務めておった木立民五郎、小山内昭人等に充分詩心、文学心を

吹きこまれ、夜役場の当直室で盛んに句会など開らく。当時のメンバーは、小山内昭人、山中利幸、神島孫蔵、沢田国春等である。

この頃である。木立民五郎氏の首領により、同人詩『蒼空』を出している。私はガリ版書きを受けもち、努力したが、二号で休刊。それからの私は、何にかに私のものを発表してみたく、読売新聞の俳壇、農業新聞俳句欄、特に東奥日報で出版していた月刊雑誌『月刊東奥』には、方言詩、短歌、俳句、川柳、冠句、ものは付け、などの文芸欄があり、全部に投稿し、全部に入選などし、月刊東奥を一日千秋の思いで待ちこがれた青春時代がある。

外に標語なども投稿し、何んでもござれと、投稿マニアとなる。この時一諸に月刊東奥俳句欄に入選した須崎正敏、亡き神島孫蔵氏を知り、それ以来須崎正敏氏とは刎頸の友となる。又早世した神島孫蔵氏の死を切に悼んだものでした。

私は投稿マニアだけでは飽きたらなくなり、同世代の人を説き伏せ仲間になってもらい、昭和十八年五月、俳句『鳴子』を創刊する。

同時は戦時中、紙不足の時代、農会で一回使った裏面を利用してのガリ版刷りである。今思い出してもよくやったものである。これも若さと云うものであったのか。

創刊号の会員の名前を列举する（実際の投句は三分の一くらいであるが）……会費は十銭である。

選者 小山内昭人

編集印刷者 沢田孝人（薫）

会 員

須崎露月(正敏) 沢田青山(政孝) 平井川尚(清) 嶋海芦笛
 (不明) 神島千秋(孫蔵) 秋元星月(惣之進) 須崎春月(為行
 山中千法(利幸) 吉崎剣士(兼雄) 沢田白人(国春) 田村白善
 (善四郎)

☒ 七月号(第三号)で入会者は四名 沢田溪春(繁市) 小山内逸
 秋(嘉一郎) 山中雲峯(不明) 吉崎朝海(春雄)

☒ 八月号(第四号)入会者山中秀四郎 木下木石(石雄) 齊藤美
 声(湯本正美) 山中兼継、齊藤礼吉、六郷村須藤純白、北海道沢
 田香洋。

☒ 十二月号(第八号)入会者 神島里香(リエ) 高杉王珠(タマ)

☒ 昭和十九年二月号(第九号)入会者 山中春雪(女性)、このこ
 ろから会員の兵隊入営が始まる。先づ小山内逸秋(嘉一郎)入営。

☒ 二月号(第十号)入会者 長富より木村呑竜(勲) 桜井春雪
 (不明)、古川雲念(竹松)。二月号では沢田溪春(繁市) 沢田
 海珠(政孝)の入営を報告している。

☒ 三月号(第十一号)入会者 北海道坂本但登人、喜良市泉谷春翠
 (幸視) 長富齊藤晴人(忠英) 嶋海雪風(不明)

☒ 四月号(第十二号)入会者 函館盛鉄雄 この号で木村勲氏を支
 部長として、嶋子吟社長富支部誕生、支部会員六名。四月号で須崎
 露月(正敏)入営を知らせている。

☒ 五月号(第十三号)では、先輩諸兄が続々入営し、投句者も少く
 なり、私も平井清雲(清)と二人、弘前健民修練所へ廿日間も連れ
 てゆかれたりで、その口説を書いており、遂にこの号で終刊とな
 る。そして、軍国主義が敗戦に導びいていくのである。

最後に嶋子会員の私から見た代表句を一号から十三号までの中から
 選び、掲出し、私にあたえられた、『かたりべ』 三号への責を果し
 たい。敗戦以降からの嘉瀬俳句のルーツは了解得れば『かたりべ』四
 号に所載したい。



選者吟

陽炎や線路工夫が声揃へ 小山内昭人

春の泥かき寄せられて乾きけり 山中天小人

会員吟

轉りや空いっばいの古い空 嘉瀬 秋元星月(惣之進)

稲穂に広く暮れゆく田ん浦かな 吉崎剣士(兼雄)

勤労の水のうまさよ耕さん 平井川尚(清)

鍛振れば地平の彼方春雷す 須崎露月(正敏)

街をゆく人それぞれの夜寒かな 沢田青山(政孝)

短夜や便り書きつゝ眠りけり 嶋海芦笛(不明)

春泥の堤長きをば務めかな 神崎千秋(亡孫蔵)

寝しづまり蚊遣火ひくく地を這へり 山中千法(利幸)

轉りや明けてくる空広々と 須崎春月(為行)

轉りや山も野原も村々も 沢田白人(国春)

夕焼や熟さぬ桜桃の実赤し 毘沙門 田村白善(善四郎)

夕凧の落葉や鷄に蹴られおり 嘉瀬 沢田溪春(繁市)

雲の峰仰いで今日も刈りにけり

霜降りて小川の水のいよゝ澄む

木下闇通れば蛙逃げて行き

網棚に誰かの寒梅見たけり

雨あとの朽葉もたげている茸

遠窓に灯りのうるむ秋時雨

庭から這い出る吾子や木の芽晴れ

教室の窓明けられて風の空

星空や雁の声して雁見えす

笹舟の基地がいつこや春の川

二筋の橋跡長くすべる風

かなかなや窓いっばいに暮るゝ山

寒月や回覧板を隣りまで

春風や子の手に廻る風車

爆音を仰げば高し春の雲

草の上春光いっばい背伸びする

春暁や反機帰らず空仰ぐ

鶯や梅の蕾にお旭さして

洗い足袋軒に列して春近し

暮れ汐に入舟ありけり臘月

春雨や河岸に出づれば風少し

春雷にひとしく悩やむ句会かな

家毎の軒に氷のたるゝ朝

女取り反こすまない平和境(国境)

嘉瀬 小山内 逸秋 (嘉一郎)

吉崎朝海 (春雄)

山中雲峰 (不明)

六郷 須郷純白 (純次郎)

嘉瀬 齊藤美声 (正美)

木下青草 (石雄)

山中梅雨 (亡秀四郎)

沢田四海 (不明)

礼文 沢田香洋 (亡良雄)

在 黒河省 沢田北斗 (政由)

嘉瀬 神島里香 (りゑ)

山中春雪 (女性)

長富 木村吞龍 (勲)

古川雲念 (竹松)

鳴海雪風 (正英)

齊藤晴人 (忠英)

増田新峰 (稔)

中元 はなびら (女)

喜良市 泉谷春翠 (幸視)

樹澗 坂本 徂登人 (不明)

函館 森 鉄雄

嘉瀬 齊藤弘徹

在興省 鳴海忠久

在興省 木村治義

柏手の音聞えくる冬木立

嘉瀬 沢田孝人 (薫)

当時は戦時でありましたが、戦時的な句は除きました。会員外でも「鳴子」誌上に掲載されてあったものは、書抜きしました。二十代以下の人達ばかりであったが、今見ても立派な俳句になっていることに驚きを感じています。



メモ帳① 北海道と津軽

『渡党 (シャモ和人)』

諏訪大明神絵詞倭起によると、元享と嘉暦(西暦一三二〇年)年代、蝦夷管領安東一族に内乱があった。蝦夷管領とは奥羽 渡島(北海道)の蝦夷を管轄するため鎌倉幕府が定め、十三添安東家が守護職にあった。

倭起には、蝦夷ケ千島(北海道)には、日ノ本党、唐子党、渡党の三種族が群居していた。渡党とは、坂上田村麿呂、源頼朝に追われた奥州の蝦夷、平泉藤原一族の残党、十三安東の流刑人、奥州豪族の戦いに敗れた落人が、松前・函館に群居していた。唐子党は肉食人種である。(シベリヤ經由の渡来人であろう)



田圃の雪も消えて、バッケ(路のとう)の芽がでる頃。網やバケツを持って『ふな』や『つぶ』を取ったものでした。

堰や田の中に、『つぶ』が沢山いて、よく取って食べたものです。今は農業のため『つぶ』は死滅し、中々取ることも出来なくなりました。

また、当時は山の沢に『サルガニ』がいて、雪どけと共に山に行ったあの楽しさが、今でも忘れられない。山は当時のことも達にとって最良の遊び場でもあったのです。

断崖の白岩の『ハゲ山』に六・七十種の穴を掘り、そこに卵を生み子を育てる『じゃこ鳥』を取るのも楽しみの一つだった。『じゃこ鳥』は川や沼などにもぐり、魚を取って食べるので『じゃこ鳥』とつけた名で、羽根の美しい鳥で、この鳥も、今は姿を見せなくなっています。

特に秋の山は、こども達の天国でした。『いちご』『ぶどう』『あけび』『こが』など食べる物が沢山あり、『叔母さんどごさ、遊びに行くより、山さ行った方がいい』と連れだって行ったものです。

嘉瀬山は馬の草刈場として一面の『かのか原』で、深い沢には三尺から七尺位の長さの『しば』が生えるだけで、胃の薬草といわれる『せんぷり』などが多く生えていました。秋に採って乾燥させ、寒に一ヶ月呑めば、一年中病気に罹らないと、今でも言われています。秋になると、小学校のウサギ狩りがありました。生徒全員が『九目ながれ』『向いながれ』『七曲り』の山々を一行に並んで囲み、缶を

鳴らし、大声で叫んで、だんだん囲いをせばめていくのです。逃げまどうウサギを追って、木枝で叩き、四・五匹のウサギを取ったものでした。

『九目ながれ』は、観音山から東に三キロ程の所で、休み場として眺めのよい場所で、小学校の遠足する所でもありました。北は金木から十三、大島小島なども眺められ、西海岸、森田、五所川原、岩木山と四方眺められ、あまりの景色の良さに、ここにたどり付くと疲れもとれる程、気が晴れるところから『九目流れ』、即ち九ヶ所も十ヶ所も遠望がきくところから『九目ながれ』と言う名がついたのだといわれます。

木のない原『かのか原』は、どうして呼ばれたかはわかりませんが冬は県下でも有名なスキー場となる。十キロレースは『川端ながれ』お城跡 『九目ながれ』を回るコースで、嘉瀬からも有名な選手が育っていききました。

今は木も大きくなって見晴しもぎかなくなりました。道路もでき、ここを歩く度に、小さい頃が思い出され、高い木に登って、四方の景色を眺めたい衝動にかられます。

伊藤 定四郎

探しを会
と入会
るに会
る会
る会
ません

嘉瀬地区内に居住する方で、村の歩み、歴史に興味を持ち、かたりべ誌上に自分の遺跡調査の成果、古文書等の解説等を発表したい方、嘉瀬ふるさとを探る会に入会して下さい。

山のことあれこれ

須崎正敏

『山神祭』

建国の始めから、租崇神霊を祭る風習に、山の神と云えば、旧暦の十二月十二日は、山神祭の日である。

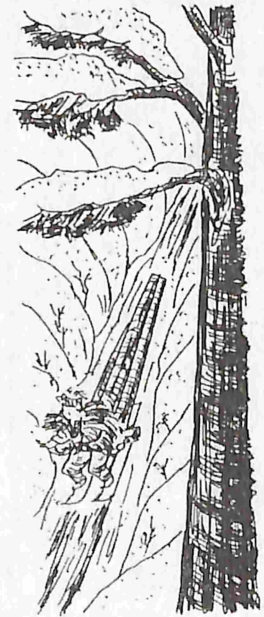


山岳信仰の厚かった昔から、この日ばかりは、山は、何人も立入ることの出来ない聖域となる。ことに樵夫、炭焼をはじめ、木材を扱う商人、職人、一般農家の人も、家業を休んで供餅を掲ぎ、山の神に神酒を捧げ、無事息災を祈ったものであるが、いつのころからか、この行事もすたれ、今では一部の人のみで、ひっそりと山の神を祭っているだけである。

『嘉瀬山』

藩政時代、津軽藩の御本山を四区に分け、前田野目山林から小泊山林までの十九ヶ山を『中山通り』と云った。嘉瀬山はこの中に位置していた。

昔仕立山、又は館山とも云われた『観音山』『お城山』『川畑嶺』



『向嶺』『九嶺』『マンチャク嶺』等々

また、小田川に沿っては『サカサキカイ沢』『リキカイ』『白岩』『小畑の沢』『滝ノ沢』『小典沢』『大典沢』から五ツの名のはい『口無し沢』を径て、『目ノ沢』『アマ岩ノ沢』『クロホシ沢』『水ヶ沢』と、水源魔ノ岳頂上までが嘉瀬山になる。

『杣小屋』

津軽藩の御本山が明治政府に移り、明治十九年に青森県下を管轄する大林区署が開庁され、大正十三年には営林署制度が実施される。この国有林で生活した労働者は杣夫と炭焼が主であったろうが、一般農家も農閑期を利用して、杣仕事の賃金稼ぎや、薪切りや、葉つき枝條（ひばの小枝を葉ごと束ねる）集めに入山する。

昔の杣小屋は、丸太組みにスギの樹皮か、ヒバの樹皮の屋根で、壁は周囲を、スギ葉か、ヒバの葉で覆うだけである。

床も、土間にこのスギ・ヒバの葉を敷き、その上に藁を敷くだけで、勿論ランプ生活であったし、囲炉裡で暖をとり、囲炉裡からの飛火しても、燃えない夜具は、十三ネコを使ったものである。

当時にすれば、この小屋でも営林署用の立派な類に入り、一般の人

達の小屋はまだ粗末なもので、冬山の小屋では、雪穴に藁で編んだ『ノマ』で屋根を覆っただけで生活した人もいる。

入山すると、長い間、山に籠るので、食糧には、塩魚や、干し魚しか持てない。野菜も、干し菜や、塩漬けばかりが主になる。

『山仕事』

山の仕事は朝が早い、夜明け前に出て、晩には、日没後でなければ一日が終らない重労働が続く。一日一升飯を喰ったのも、この頃であった。山子が二十人居ると、一日に二斗の米を炊くことになる。現代っ子の食生活からすれば、想像にも及ばない事かも知れない。

作業が危険なものだから、忌み嫌う風習もある。『出針』『口笛』『汁かけ飯』。それに小屋での人員が十二人になると、もう一人分の人形を造り、一膳を作って十三人になったのだと云う奇習もある。

夏山で伐木造材した丸太は、冬山の雪を利用して搬出する。沢出しには、袖削りの手製の『バヂ』や、『ヨヂ』櫓で搬出する。急斜面の丸太出しは、主に『バヂ』が使用されるが、二丁バヂの場合もある。太い丸太になると、根の径が、五・六尺もある。

バヂ乗りは、この丸太の切り口を背負うかたちで、舵を取りながら下るさまは壮観なものであるが、危険も伴う作業である。

沢出しされた丸太は、馬櫓に依る搬出や、春の雪解けを待って、川を利用して流送されるが、薪材になる雑木の『ナガシ木』も、村人が共同で川流しする。

この薪材一本ごとに、鉈で横傷を記し、一本傷はAのもの、二本傷はBのものとし、あとで選り分けるのである。

土場は、小畑の土場、小田川の土場、嘉瀬の八幡様前の土場と、今にその跡地に地名が残っている。

『炭焼き』

今でも山歩きをすると、よく炭焼窯の窯跡が見られるが、昔の炭焼きは、子供の寝顔しか見られなかったものだと言はれている。朝、子供達の眠っているうちに家を出て、夜家に帰り着く時間には、もう子供達は床の中だからである。

炭焼も山子も、当時の雨具は、『スゲ笠』『蓑』であったし、覆物も『ワラジ』『ツマゴ』『ノッペラワラジ』である。朝覆いて出ると晩帰り着くまでにスリ切れて持たない時もある。こんないでたちが終戦のころまで見られたものだ。

『トロッコ時代』

明治四十二年に青森、蟹田、喜良市間に、森林軌道が開通され、その後小田川線も、水ヶ沢の双股近くまで軌道が伸ばされて、営林署専用の運材だけでなく、民間にも林道の使用が許可されて、薪運搬もトロッコ時代に入り、山の行き帰りもトロッコが使用され、昭和四十三年の小田川ダム着工のころまで、トロッコの時代が続いたのである。

明治末期まで人力伐木造材Ⅱ人力木寄せⅡ雪櫃出しⅡ流送又は馬車
大正・昭和に入ってⅡ人力伐木造材Ⅱ人力木寄せⅡ雪櫃出し、森林

鉄道。
現在はⅡチェーンソー伐木造材Ⅱ小型集材機Ⅱ大型集材機Ⅱトラック
に変わる。

農家の機械化にくらべて、林業の機械化は遅れていると云われたものだが、昭和三十年代に入り、機械化の進歩は著るしいものがある。林野庁による昭和三十三年からの林力増強計画で、戦後の復興と、高度成長時代に果した役割は大きいものがあつたらうが、その代償もまた大きい。

山は幼木林に変わり、森林の貯水能力を失いつつある。大正の初期ごろ小柴四束を盗伐して罰金四銭、山留めの刑にされた昔は、いかに山を大事にしたことか。

第二次世界大戦中までは、ウツソウとしたヒバの美林が残されていた。そのころ山仕事に入ると、色白の人になってしまう。木立の日蔭ばかりの作業であつたからだ。

春の山菜、秋の茸と豊富で、川魚、野鳥、けもの達も目を楽しませてくれた。汗して山歩きしたことを想えば、現代の車時代からすれば昔日の想いである。

『将来に遺産を』

ヒバは、伐っても伐っても、稚樹の出てくる性がある。中山山系には、一番ヒバが適しているのかも知れない。一時期、生長の早いスギに変える計画がなされたであろうが、特産でもあるヒバを見直す時期に来ているのではないだろうか。百年の大計は、気の遠くなる現代ではあるが、将来のためにも、もっと山をヒバを大事にしたいものである。

メモ帳② 北海道と津軽

『羊蹄山に政所』

齊明記には齊明帝四年から六年にわたって、阿倍比羅夫船二百隻で、奥州北海道に蝦夷征討、五年に羊蹄山に政所（政庁）を設置、六年には石狩川に集結していた爾慎ツングース一族を退治したと伝承。

『極悪非道の人種差別』

探検家松浦武四郎が安政四年（西暦一八二一年）オオーツク沿岸斜里を調査したときの記録（日記）では、アイヌの女が十六・七になると国後島に連れ去られ、諸国からの雇い水夫の相手をさせられ、男も成人になると離島に送られ、こき使われ、夫婦者でも、夫は遠い漁場に連行され、残された婦女子は、シャモ（和人）の会所や番屋で、役人手代のなぐさみものにされたと記録している。

寛政（西暦一七八九年―一八〇一年）斜里地域で二千余人居たが、文政五年（西暦一八二二年）は三十六軒千三百二十六人居たアイヌ人も、七百十三人に半減したという。

徳川幕政末期の近世に致つても、このような状態で、亡びゆく民族となつていった。東日流蝦夷が未開の国族として、大和朝廷の東北侵略にさらされた様も、そうであつたらう。

嘉瀬話 ①

婿の横座



嘉瀬の金九郎が飯詰に婿養子になって、三十年になる。

しかし舅が八十になるが、まだ元気で財布をがっちり握り、
炬端の横座（家長が座るところ）にどかっと座り、気管で
イロリのふちを叩き威厳を示している。

金九郎は五五才、今だ借子の存在で仕事に酷使されてい
るせいか、頭は禿げ、目腐れで舅の爺さまよりむしろ年老
いて見られた。

爺さまに睨まれると、小さい身体が一層しぼんで、小学
生が睨られているように、イロリ端の火の遠いキシモド
（薪木を置くところ）で背を丸めるのみだった。

金九郎は、爺さまをうらめしくいつも「早くヂッコ

（爺さま）が死ねばいい」とそればかり願っていた。

金九郎が炭焼きに冬山へ入り、小屋に寝泊りして一ヶ月
たつよある日、ケヤゲ（友人）二人が息を切らせて、山を
登ってきた。

友人 「金九郎、夕べ、爺さま死んだじゃ」

金九郎 「まだ（又）私こと喜ばせるきなて」

友人 「こんどば、嘘でねえ、ほんとかだ」

金九郎 「何回も、だまされてるはんで、ほに（本当に）さ
れねえ」

友人 「こんどば、ほんとかだね」

金九郎 「ほんとね、ほんとの話しだな」

友人 「ほんとだてば、さあ、早く支度して、山がら下り
ろ」

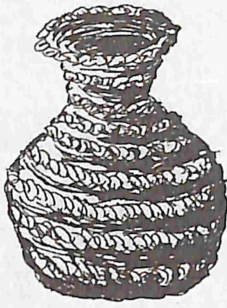
友人が山を下り、二ツ目の沢を越えたが、金九郎の姿が
見えなかった。

どうしたのかと、友人二人が引き返し炭小屋をのぞいて
見たら、金九郎は「ヂッコ死んだ、ヂッコ死んだ、おわー
面白いじゃ」とアワ踊りのように両手を上げて、何時迄も
踊っていた。

特集

紙上討論

ゼミナール



秋元惣之進

嘉瀬の語源

昭和五十一年十二月一日金木郷土史編集委員会編集・金木町役場発行の金木郷土史によると……………。

嘉瀬は古くからの開村と思われる。康永二年（西暦一三四二年）安倍貞季の地図に中柏木・嘉瀬・小田川城等記載されており、嘉瀬は一時「嘉清」と称されたこともあり、為信が津軽を統一した頃は、現在の水田の大半は十三瀉の名残りである一面の湿地帯だったという。アイヌ語から来たと思われるが、即ち「力」は丘、「ブ」は広くの意味で、「力」「ブ」がなまって「カセ」になったらしい。カセとは丘が広いという意味である。と記載されている。

古記録。古文書、古地図に「加清」「加勢」「嘉瀬」「嘉勢」とも散見されるが、あなたなら、嘉瀬が津軽に位置する環境と、文化交流、文化の導入、入口の流動等を歴史的に勘案して、あなたなりに独断と偏見をもって想定、ズバリ嘉瀬の語源について答えなさい。

（企画構成 木下清一）

嘉瀬附近一帯を支配していた嘉瀬光明宗範の「名字」を取り、「嘉瀬」と呼ばれたとしたい。

一説には、嘉瀬は「アイヌ語」から来たとしているが、即ちアイヌ語で「力」は丘、「ブ」は広いと、訛って「カセ」となったらしいとするも、「丘が広い」と地形を根拠として憶測するのは、どう見ても私には解せない。

また一説には、嘉瀬人には窮貧の人々が多く、金木に行き、お金を「借せ」お金を借せと金木に多くの人が行って生活の資金としたことから、「借せ」が「嘉瀬」の通り相場となったことから「嘉瀬」と

嘉瀬の語源を知ろうとする時、正確に知り得る人は無いと思うが、あるとしても、近隣の町村の歩みや、地方史からの引用と、憶測で造りあげたのが、嘉瀬の語源かも知れない。私もその一人であるが、私なりに究明してみる。

私は、世代から世代へと、今でも嘉瀬の……達に語り継いできた、